



May I help you? 情けはひとのためならず

三重県立川越高等学校3年

いとう きょうこ
伊藤 叶子さん

友人がフランスに出かけた。現地の人とのふれあいを何より楽しみにしていた彼女は、簡単な会話ができるよう、自分なりに予習もしていった。フランス人は誇り高き民族で、多少理解できたとしても英語での問いかけには応じてくれないと聞いていたからだ。

パリの蚤の市で、彼女は何とも奇妙な声を耳にした。歌うようなフランス語が飛び交う中、彼女たち日本人に向けられた声。

「コンニチハ、ビンボープライスOK」

ビンボープライス……誇り高き民族から発せられた、この情けない言葉は、彼女の旅を台無しにした。仮にも、自らの意志でフランスを訪れた者が、「ボンジュール」と声をかけられて戸惑うことがあるだろうか。せっかくだが、日本語での声かけは、日本人客の心をとらえることなく終わった。

先日、私は清水寺に行った。参道は観光客で溢れ、坂の両側に続く土産物店からは、

「おこしやす、おおきに」

と、はんなりした京言葉が聞こえ、旅情がかきたてられる。次の瞬間、私は耳を疑った。

「アンニョハセヨ、アンニョハセヨ」

後ろを歩く韓国人グループに、さっきまで京言葉を語りかけていた店員が叫び出したのだ。よくよく聞いてみると、

「ニーハオ」

もある。確かに休日の京都はアジアからの観光客が多い。ツアー客を率いる外国人ガイドの大声は、

ここがどこかわからなくさせるほどだ。「アンニョハセヨ」や「ニーハオ」は、彼らへの親切な声かけなのだろうか。母国語で声をかけられ、彼らは日本に親しみを覚えるとでもいうのだろうか。

「ビンボープライスOK」はパリだけのことではなかった。日本文化にふれるためやって来た彼らには、ありがた迷惑な話だ。さっきまで心地よかった「おこしやす」までが、観光客相手のパフォーマンスに聞こえてきた。

私の住む四日市市は工業都市だ。近隣には、日本の自動車産業を支える関連工場も多い。そのせいか、十数年くらい前から、外国人居住者が増えている。住民の4割がブラジル人だという団地もある。集団で暮らし、集団で働く彼らは、ほとんど母国語だけで過ごし、日本の文化に馴染む必要性も切実には感じない。当然トラブルが起こる。

ゴミ出しをはじめとする町内のルールは守らない。夜遅くまで大きな音で音楽を流し、歌う、踊る。国民性の違いだけでは片づけられない。困り果てた住民の姿は、NHKのテレビ番組でも取り上げられた。同じような問題に悩む各地の住民の声を参考に、解決策を模索し、四日市の住民たちも動き始めた。

出会い教室という互いの母国語を学ぶ場を作り、積極的な関わりを持つようにした。それまでは、町内のルールや告知を、ポルトガル語の貼り紙一枚ですまそうとしていたのだが、もっと血の通った交わり、生の声でのやりとりで歩み寄ろうとしたのだ。

団地恒例のまつりにも誘い、一緒に楽しむ機会も作った。日本に来たのなら日本語を覚え、日本のルールに従うべきだ、という高圧的な冷たい視線からは何も生まれない。最初の一步は、多少無理やりであっても、相手を恐れず、蔑みもせず、近づくことが大切なのだ。

地域の取り組みは今も続いている。遅ればせながら行政も協力し、いろいろな理由から遠い国で不自由な生活をせざるを得ない人々が孤立しないように、と試行錯誤が繰り返されている。それでもまだまだトラブルはある。習慣や言葉の壁は、それほどまでに厚い。

広い世界から見た日本は、小さな小さな島国だ。そこに1億2000万以上の人が住み、多くはこの国でしか通用しない言葉を話す。外国からの観光客には、うわべだけの親しみを込めた安っぽい言葉をかけるが、この国に生活の基盤を置く外国人に対しては、なかなか心を開かず相手にのみ努力を強いる。確かにこれは日本だけのことではない。世界に飛び出した日本人は、必死に現地の言葉を習得し、現地の生活に馴染むことを強られる。勤勉な日本人は、外に出た時の努力を怠らない。だが、この小さな内にいる時は、できる努力さえなかなかしようとしにくい。外国人居住者との関わりは、この小さな国に暮らす私たちにとり、広い世界を知る絶好の機会ではないか。居ながらにして異文化を感じるチャンスなのだ。一步踏み込む勇氣さえあれば、私たちの世界観は変わるはずだ。

“ May I help you ? ”

この言葉を初めて習った時、私は使いたくて仕方がなかった。困っていそうな外国人を見ると、声をかけたくてうずうずしていた。かけてみたところで、その後が続くはずもない。それでも話してみたい。あの頃の

好奇心や冒険心が、早くも薄れてきている。大人になるということは、大きなチャンスを遠ざけてしまうことなのだろうか。

私は日本語が好きだ。この美しい言葉を世界に向けて発したいという思いもある。だが、そのためには、他国の言葉も理解しなければならない。たとえ苦手であっても…。

外国に行く機会は、まだ多くはない。だが、小さな島国にいただけでも世界を見ることはできる。広い世界に飛び出す前に、私はこの国から世界の一端を覗いてみよう。ばかばかしい羞恥心など捨て、ついこの前まで持っていた“ May I help you ? ”の勇氣を思い出そう。同じ国に暮らす、同じでない人たちとの間に立ちただかる高く厚い壁、それを少しずつ砕き、直接向かい合うことが、生活レベルで世界と関わることの第一歩となるのだ。母国語への誇りを確信するためには、まだまだ知らなければいけない言葉がある。“ May I help you ? ”は、決してひとのためだけにならず。私自身を助けることになる。

日本から見た世界、それは果てしなく広い。私はまだそのかけらすら知らないのだ。